

左利き者の生きづらさに関する社会学的研究

A Sociological Study on Uncomfortableness of Left-Handers

コース 社会学

学生氏名 小濱 優士

キーワード： 左利き 生きづらさ マイノリティ
Key Words: (Left-Handers) (Uncomfortableness) (Minority)

左利き者は、周りの大人から矯正をされたり、右利き用道具の使用を余儀なくされたり、右利き者に気を遣ったりするなど、右利きの者が経験することのない生きづらさを持つ。本論文は、こうした生きづらさの実態を明らかにするとともに、現在では過去と比べて生きづらさが変化したのか、変化したとすればどのような原因でどの点が変わったのかを解明することを目的とするものである。

研究方法としては、左利き者の権利擁護を目的に活動していた「左利き友の会」の機関誌およびその他の文書資料と、左利き者への聞き取り調査を分析した。左利き者の生きづらさを「書字」「道具」「偏見」という3つの主題に関して明らかにするとともに、1970年代に行われた左利き者の生きづらさを改善する活動に焦点を当て、その活動以前と活動以後で生きづらさがどのように変わったのかを質的、量的の両面から分析した。

書字に関する生きづらさには「書字の困難性」「右利き者の左手書字非難」「右手書字への矯正」の3点があった。「書字の困難性」については左利き友の会が左手書法を独自に開発し、克服しようとした。「右利き者の左手書字非難」「右手書字への矯正」に関しては、左利き友の会が国に対して陳情や署名運動をしたり、松田道雄が小学校での指導方法を問題視して小学校教員や教職員組合をたびたび批判したりした。これらの活動によって「右利き者の左手書字非難」は減ってきたが、「書字の困難性」「右手書字への矯正」はあまり変化がなかったことが明らかになった。

道具に関する生きづらさは「左利き用製品の不足」と「左利き用製品の販売場所の不足」の2つがあった。「左利き用製品の不足」に対しては、左利き友の会が左利き用製品の情報を左利き者に提供したり、新たな製品の開発を行ったりした。「左利き用製品の販売場所の不足」は左利き友の会が百貨店に左利きコーナーを設置させることによって対応した。しかし、左利き者が右利き用製品をある程度使えたこと、価格が割高であったことから、左利き用製品自体がそれほど定着しなかった。

左利きに対する偏見には2種類あった。それは「左利きは恥ずかしい」という伝統的価値に根差した「慣習的偏見」と、「左利きは生活しづらい」という日常生活への懸念からくる「生活的偏見」である。「慣習的偏見」の克服には、左利きをテーマとした歌謡曲のヒットが大きく貢献した。それを機に大衆雑誌等で左利きがポジティブな意味で取り上げられるようになり、「左利きは賢い」というイメージが形成された。「生活的偏見」に関しては、左利き友の会や松田が左利き者の生きづらさを世に知らせ、それを解消しようと活動したりして、生活で不便がない社会を目指した。これらの結果、「慣習的偏見」はこの40年で消失した。しかし、「生活的偏見」についてはまだ一部存在していることが明らかになった。

結論として、左利き者の生きづらさは1970年代から現在にかけて「慣習的偏見」が消失したという点において、改善されてきていると断定できる。しかし、「生活的偏見」が残存していることから、それに関連した生きづらさはまだ認められると言える。